社会という網がほころびた西洋　「蝶の雑記帳 135」

老蝶に刺激をくれて小さな頭を働かせ、なんとか夢を見させてくれるのは今や賢人たちの著作だけになった。今回は、広告が E. トッドの書物『西洋の敗北』に案内してくれた。この人の断定的な物言いは、愚鈍な蝶を眠りから覚ますのに十分な効き目がある。

ロシアのウクライナ侵攻について、新聞やテレビから情報を得る者には善悪の区別は明らかである。しかし、人間社会とその政治を、社会的な生物である人類のつくりだすものとしてとらえるトッドは、社会学的な統計に現われるデータに基づいて冷厳に考える。その考察を整理した書き物には単純な善悪という言葉はほとんど現われない。だからといって、トッドに善の精神がないのではない。文章と言葉づかいと行間に、曲折を経ながらでも結果として善い社会に向かうことを願う著者トッドの意志が現われている。

この人の著作の価値を高めているのは優れた方法にある。多くの人文・社会学の書物は著者の頭脳で生み出されるアイディアに負っているが、トッドの場合に、そのアイディアは現実の社会で観察できる統計的なデータと結びつけられる。発想は実証力をもつ要素に支えられて、そこから組み立てられる理論も検証性をもつことになる。しかし、社会の状態を特徴づける観察可能な指標をたやすく選び出すことはでき

ないし、いつも決定的な統計データが得られるわけではない。だから、導かれる結論のどれもが十分な証拠をもつとは限らない。実際、トッドは自分の言説が誇張を含むことをわきまえていて、誇張があることを隠さない。けれども、論拠を示しながら明確に述べられる結論は部分的にせよ実証性を含む。読む者は、彼の言説を真剣に受けとめて考えなければいけない。

トッドは、ロシアとウクライナの戦争が、第三次世界大戦と呼ぶことのできる世界状況のなかで起きている、と言う。イスラエルのパレスティナとレバノンに対する戦争、北朝鮮のロシア-ウクライナ戦争への参戦、加えて昨年末に起きた、世界の国々のなかでも最も強い権力をにぎる韓国大統領の国会に対する血迷った戒厳令や、シリアの独裁政権の崩壊などを見ると、トッドの見立ては正しいかもしれないと思う。

こんどの著作『西洋の敗北』は、彼の呼ぶ第三次世界大戦の深層を明かそうとするものである。ロシア-ウクライナ戦争は、深層で、米国が西欧といっしょにロシアを封じ込めようとする戦争で、米国と西欧が武器を供給してウクライナ人に戦わせている、というのである。さらに突きつめれば、この戦争の真相は、近世・近代に続いて世界を主導してきた西欧と米国の現代社会――その主要な特徴がキリスト教のなかでもプロテスタンティズム・自由民主主義政治・資本主義経済である社会――が変質し転換の時期を迎えていること

にある、というのである。この書物では、そういう米国と西欧が合わせて「西洋」と呼ばれている。

社会と経済についてトッドは、わたしの知らなかった統計データを次々に示して、ロシアの現状を次のように分析する。アルコール中毒による死亡率・自殺率・殺人率の統計がはっきりと社会が改善しつつあることを示す。あいかわらず世界第二位の武器輸出国であり、農業生産物の純輸出国になったことが、経済の復興を物語るという。ウクライナ東部の州とクリミア半島奪取に対する西洋の経済制裁に耐えて、ロシアは現在も成果を上げつつある、とトッドは見る。総じて、21世紀になってロシアの社会と経済は安定した、と判定する。

この稿の出だしをここまで書いて、諸般の事情から2か月以上経ってしまった。続きを書くのがむずかしくなっている。しかし、トッドが提起している問題は、単にロシア-ウクライナ戦争と世界大戦の状況という“小問題”にとどまらず、この稿のタイトルに表現したほどの大問題だと思う。それをなんとか考えたい。ところが、『西洋の敗北』は400ページを超える著作である。記憶を呼び起こすのが困難になっているから、論旨を解説している巻頭の「日本の読者へ――日本と西洋」および「序章」を読み直して、そこから記憶をたぐり出して考えていくことにしよう。

＊

目次の前に置かれた「日本の読者へ――日本と西洋」は、日本が「第二の西洋」であるという見方を提示して、今日の世界情勢が日本人にとってとても重大であることを説く。日本の速水融という人の所説「遅くとも一五世紀以降の日本では、一部の西洋との発展の類似性（人口学的、経済学的、社会学的）がその歴史を特徴づけてきた」を引いて、トッドは「日本と西洋との政治世界の結びつき」に同意する。――日本とヨーロッパは、ロシアから中国にまたがる「ユーラシアの中央の塊（かたまり）」に対する「対照的な立場」にいるところに根本的な共通点がある――と。

トッドは、日本をドイツ・米国・英国・フランスなどの「経済的近代の西洋」の中に入れる。ただ、もう一つ別の分類として「政治的近代の西洋」という見方を提出して、西洋のうちでも英国・フランス・米国だけがこちらに属す、と見る。それは、トッドが以前から提唱している人類学的な見方から来る。英国・フランス・米国は平等主義で個人主義的な「核家族構造」をもつのに対し、ドイツと日本は兄弟間が不平等な「直系家族構造」をもつ、ととらえるからである。それに対して、日本と西洋のあいだの「ユーラシアの中央」にある中国やロシアは、兄弟間が平等な「共同体家族構造」をもち、西洋とは異なると考える。

そして、「西洋の敗北は今や確実なものとなっている」と判定するトッドは、「日本は敗北する西洋の一部なのだろうか」と問いかける。

続いて、「西洋の危機の核心は、米国・英国・フランスにある」、「これらの国においては政治的危機がすでに如実に表れている」と言って、その内実が語られる。対ロシア制裁はヨーロッパ経済をストレス状態におとしいれたが、フランスの経済と政治体制が最初に崩壊しそうだと見る（トッドは自国のことを心配している）。イギリスの保守党の転落やアメリカの民主・共和両党の深刻な対立も、自由民主主義国家の解体によって引き起こされた、と見る。ここで、始まっている「西洋の敗北」は、ロシアの勝利を意味するわけではなく、――これらの国での宗教面・教育面・産業面・道徳面における西洋自身の崩壊プロセスの帰結なのだ――と重大な診断が下される。

ところで、日本は、ドイツ以上に二つ目の「西洋」つまり「自由主義の伝統は持たないが近代的な西洋」に属している。日本はドイツと同じく、NATO が崩壊することでアメリカの支配から解放されるだろう。しかし日本はそれによって、韓国とともに、中国と独力で向き合わなければならなくなる。これが、トッドが日本について気にかけていることで、日本がアメリカとの関係にかなり慎重になるべきだと助言する理由である。

そのあとに、現在の世界状況を、非効率的で残忍な「新自由主義的資本主義」や進歩的というよりも非現実的な「社会的価値観」によって、西洋はその他の世界から見限られ、中

国やインドほかの諸国が「国民国家の主権」というロシア的な考え方を好むようになった、とする見方が語られる。

トッドは、日本にとって「独自の歴史という感覚は本能的なものだ」と見るから、西洋の敗北は日本が「独自の存在」として自らについて再び考え始める機会になるはずだ、と考える。今の日本人を買いかぶりすぎていると危惧するけれども、彼の助言を真剣に受けとめるのがよいと思う。

＊　＊

序章「戦争に関する 10 の驚き」は、日本のマスメディアだけから情報を得ているわたしに、ロシア-ウクライナ戦争の本当の内実を教えてくれる。たとえば、四つ目の驚きとして挙げられる「ロシアの経済面での抵抗力」や五・六・七の驚きとして記述されるヨーロッパの内情がある。しかしここで考えたいことは、世界史に起きつつあるもっと重大な事態である。

最大の驚きとして挙げられるのは、アメリカの軍需産業の欠陥という問題である。超大国アメリカはウクライナに対して砲弾をはじめ何も確実に供給できなかった。それは、ロシアに対して圧倒的なアメリカの「GDP」に、さらには現在の政治経済学の計量にまで疑問を突きつける、というのである。その政治経済的弱さに加えて、九番目の驚きとして挙げられるのは、「西洋の思想的孤独と自らの孤立に対する無知」である。

最後の十番目の驚きは、今まさに現実となりつつあるとする。それがトッドの言う「西洋の敗北」である。西洋は「自己破壊の道を進んでいる」と。――私たちは今、グローバリゼーションが完成した時代、つまりそれが最高潮に達し、完了した時代を生きている。すると、実際にはロシアが主要な問題ではないことが見えてくる。…。ロシアのいかなる危機も世界の均衡を脅かすことはないのだ。そうではなく、西洋の危機、とりわけアメリカの末期的な危機こそが地球の均衡を危うくしている。……

このあとにトッドは、西洋とロシアの対立を多面的に論じているが、それについては省略しよう。

＊　＊　＊

第4章「西洋とは何か」になると、第3章までの主に政治的な問題よりも広く、西洋の危機について社会の基礎にあるさまざまな基本的な問題を指摘していく。西洋は、現在不安定な場所になっている、むしろ病を患っていると診断して、その自由民主主義の問題、「産業基盤の深刻な弱体化」という経済的な問題、さらに、「プロテスタンティズムの死」と呼ぶ宗教の問題にまで言及する。

西洋の社会全般にわたって指摘された問題を要約して言うのはむずかしい。乱暴だが、目についた言葉を挙げてみよう。――西洋にはもはや民主主義は存在しない、リベラルな寡頭制（かとうせい）である・・・。自由民主主義諸国の寡頭制の機能不全

を制御し管理する必要があるが、選挙を続けながら、民衆を経済の運営と富の分配から遠ざけるためには、民衆をだまし続けなければならない――とまで言っている。

教育の階層化が進んで、社会のアトム化やアイデンティティの粉砕を引き起こし、社会の全階層に影響を及ぼしている。そして、宗教的実践と宗教的統率の弱体化が世俗化の第一段階であり、ゾンビ状態を生み出した。この段階で宗教は消滅するのだが、その宗教の慣習と価値の本質的な部分はまだ存続する、と言う。しかし、ゾンビ状態が世俗化の最終段階ではなく、宗教から受け継いだ慣習と価値観もやがて消滅する。それが今私たちが生きている状態だ、とまで言う。それを「宗教のゼロ状態」と呼び、「国民国家が解体され、グローバル化が勝利するのは、この時である」、「いかなる集団的信仰も失った個人」になるのだ。その「プロセス全体の長大さそのものが、こうしたプロセスとその帰結の不可逆性を示している」と宣告する。このことについて具体的に観察されるさまざまな現象が記述してある。「西洋の敗北」という言葉はこういうことまで含んでいるのだ。なんと恐ろしい徹底した指摘だろうか。日本もそういう西洋に属しているとすれば、ほっておくことはできない重大事だ。

考察はさらに続き、集団的信仰を失った個人が道徳的規律を失うことを危惧する。歯切れよく断定的にものをいう人が、「個人というのは集団においてのみ、また集団を通してのみ

大きくなることができる。単体としての個人は自ずと小さくなる運命にある」と言って、人間を大切にしていることを吐露する。そこには「良心」という言葉まで出る。「宗教ゼロ状態」は「無」あるいは「虚無」をはっきりと提示すると言って、ニヒリズムの危険にまで及ぶ。

統計的手法を使って人類学的に社会を研究するトッドは、人間の社会が溶けて解体することを恐れているのである。わたしのこの稿の表題はその危機を表現しようとしている。

＊　＊　＊　＊

第 5 章～第 8 章まで、欧州・英国・北欧・米国について、それぞれの地域がおちいっている危機的な状態を分析して率直な批評が続く。それらの批評も、日本のマスメディアではお目にかからない辛辣なものである。その批評はひるがえって日本の本当の状態を明るみに出している、とわたしは身につまされて思う。

たとえば、「EU は、NATO の背後に消え去り、かつてなかったほどにアメリカに従属している」とする見方は、まさしく日本にも当てはまる。実際、トッドの率直な言葉づかいでは、「日本もアメリカの従属国」なのである。トッドの指摘することは、日本でもいくつもの現実の事象に現われているではないか。

「ウクライナ-ロシア戦争の支援国の公式目的は、ロシア人の居住地であるクリミアとドンバス地方をキエフ政権下に

移すというものだ」と見るトッドは、本来の歴史家たちが侵略戦争と見なすはずの戦争にヨーロッパが正式にかかわってしまった、と考える。ヨーロッパ人であるトッドは、なぜ「平和の大陸」だったはずのヨーロッパがそういう戦争に参加するのか、と問うことになる。トッドには、「自分たちの軍隊を送らず、物資と資金の提供で、ウクライナの軍人や民間人を犠牲にしている」と見えるのである。そして、カントの名まで出して、「道徳ゼロ状態」が西欧に生まれている、と嘆く。この見方はかなり当たっているのではないか、とわたしは考えこまざるをえない。

このようすを、「ヨーロッパというプロジェクトは死んだ、社会的かつ歴史的な虚無感がヨーロッパのエリート層と中流階級を襲った」、「EU は、複雑すぎて管理不能で、修復不可能な機関であり、その制度は空回りしている。単一通貨は、内部に修復不可能な不均衡をもたらした」と表現する。参考に値する見方である。「プーチンの脅威に対する EU の反応は、むしろ自殺の衝動の表明だったのかもしれない」とするうがった言い方は成り立つだろうか。

「西ヨーロッパ最強国であるドイツの道徳的かつ政治的な転落は、その他すべての国の転落と同時に起きた」と言ったあと、統計データを用いてドイツ社会を分析する論述が続く。社会と文化についてのその考察は、ドイツが日本と対照させて考えるべき国だから、日本人に役立つと思う。さらに、西欧の政治状況と経済社会状況についての記述部分も、西欧が

アメリカの軍事的な支配下におかれたという見方も、たいへん示唆的である。この章の最後の節のタイトルは「米国の衰退と欧州支配の強化」である。米国が政治・経済上で衰退していながら欧州を支配下におく現状を概括しているが、日本が同じ状況にあることが知られる。トッドの見方を参考にすれば、米国に対して、日本が西欧と政治・経済的に同じ状態に置かれているという認識は重要だろう。現在の日本で「日米同盟」や「NATO との連携」という言葉が気おくれもせずに使用されることが、この見方を裏づける。

英国が「国家ゼロ」状態に突き進んでいるとする第 6 章と、北欧などを先頭としてフェミニズムから好戦主義へ向かっているとする第 7 章は、とりあえずおいておこう。

第 8 章「米国の本質」を一言で表わせば、「アメリカ社会の価値観と行動は今日、本質的にネガティブなものだ」ということになる。「1930 年代のドイツのダイナミズムと現在のアメリカのダイナミズムは、空虚を原動力としている点で共通している」と言われる。昨年の大統領選挙と今年に入ってのトランプ政権の行動を見れば、この言葉にうなづかざるをえない。さらに、「今日のアメリカに私が見るのは、思想面における危険な〈空虚さ〉と脅迫観念として残存している〈金〉と〈権力〉である。金と権力はそれ自体が目的や価値観にはなりえない。この空虚が、自己破壊・軍国主義・慢性

的な否定的姿勢、要するにニヒリズムへの傾向をもたらす」という指摘は、新大統領に当選したトランプにそっくり当てはまるではないか。

トッドは、お得意の統計による社会分析の数字を示して、米国をほかの西洋と比較して、その衰退ぶりを明らかにする。二つの指標を表にしてみよう。

	米国	英国	ドイツ	日本
平均余命	76.3 歳	80.7 歳	80.9 歳	84.5 歳
乳幼児死亡率	5.4 人	3.6 人	2.1 人	1.8 人 /千人

上の表は、社会の状態の不健全さが米国・英国・ドイツ・日本の順に改善傾向にあることを示している。この指標に関連させて医療費を考えると、米国における「一部上流階級の背信行為」が浮かび上がり、それをトッドは「道徳ゼロ状態」と呼ぶ。

このあとに続く小節の表題は、「不正義の勝利」、「プロテスタンティズム・ゼロ状態と知性の崩壊」、「神の恩寵を失う」、「能力主義が終わって寡頭制へ」で、米国でそういう事態が起きていることを示す。

＊　＊　＊　＊　＊

第 9 章「ガス抜きをして米国経済の虚飾を正す」は、われわれが慣らされている GDP という指標で一国の経済を計量するやり方を批判する。「2023 年に、ウクライナが必要とす

る兵器をアメリカが生産できていないことを多くの研究が明らかにした」と切り出して、「アメリカに産業基盤が欠落していて、いかなるミサイルも十分に生産できなくなっている」実態を明らかにする。そして、「グローバル化した世界における物理的なパワーバランスをより良く評価するために、工業中の工業としての工作機械の生産」の指数を示す。それによれば、2018 年の世界の工作機械生産の比率は次のようである。中国が 24.8%、ドイツ圏が 21.1%、日本が 15.6%、イタリアは 7.6%、アメリカは 6.8%、韓国は 5.6%、台湾は 5.0%、インドは 1.4%、ブラジルは 1.1%、フランスは 0.9%、イギリスは 0.8%。

このような比較を初めて見たが、マスメディアの伝えるニュースの背景をよりよく理解することができる。たとえば、イタリアやイギリスが、アメリカではなく日本といっしょに戦闘機を開発しようと意図する理由を理解することができる。かつて言われた言葉で表現すれば、アメリカの産業構造が「空洞化」しているのだ、それも甚だしく。アメリカで主要な工場地帯だった地域は今では見捨てられた「錆びた地帯」と呼ばれ、トランプに頼ろうとしている。

農業も、米国が 1994 年にメキシコ・カナダと北米自由貿易協定 NAFTA を結んで以降、集中・専門化・衰退のプロセスをたどったというのである。2022 年の小麦の生産量をくらべれば、ロシアが 8000 万トンなのに対して、米国は 4700 万トン。現在、米国はかろうじて農産物の輸出入の均衡を保っ

ているにすぎず、10 年か 20 年のうちに輸入国に転落するのが確実とされる。トランプは、農業への影響に気づいているか分からないが、30 年間の NAFTA の結果に対抗するために、カナダとメキシコに高関税をかけようとしている。

トランプ現象は、アメリカの経済構造が、浮世離れをしたアメリカ金融資本主義によって無残に変質・衰退した状態におちいったことに対するあがきと言える。

トッドは、アメリカの経済力を、現在用いられている GDP ではなく、工業・建設業・交通・炭鉱・農業などを中心とする指標で計るのがよいと提唱する。そうして試算する「国内実質生産」で比較すれば、一人当たり国内実質生産は西ヨーロッパ諸国のそれよりも下回る、と指摘する。その指数で日本を評価したらどうなるのだろうか。日本は大陸ヨーロッパよりも米国や英国の新自由主義に追随したから、一人当たり GDP での低い評価よりもさらに低い国内実質生産になるだろう。アメリカのことよりも日本のことが心配だ。

このあとの議論も、今日の世界の実状を知るのに有益である。他国との財の貿易は、工業生産・総合的な生産・あるいは工作機械生産に次いで、その国の実力を示すが、アメリカは輸入という点滴で生きている。それをまかなっているのは輸出ではなくドルの発行である。世界の基軸通貨であるドル立ての国債を発行して貿易赤字を穴埋めしているのだ。貿易赤字は、2000 年から 2022 年にかけて 173%も膨らんだそう

だ。これが世界のお金の循環を歪めている。タックス・ヘイブンも元凶はアメリカの金融資本主義にある…。

続く小節のタイトルは、「非生産的で略奪的な能力主義」、「輸入労働者への依存」で、アメリカ社会の暗部を明るみに出す。トランプは、アメリカ経済が依存しているその輸入労働者を国外へ追放することを始めた。アメリカ経済に跳ね返って、社会を混乱におとしいれるだろう。トッドは、ただ労働者一般を問題にするのではなく、ソフトウェア開発者やエンジニアや物理学者に占める外国人の割合にも注目する。米国で博士号を取得した外国人の表まで示す。外国の高学歴者は大多数母国に帰るから、米国は自国のエンジニアを十分養成できなくなっているのである。それはアメリカの軍事力にも影響を及ぼすだろう、と言っている。

この章最後の小節のタイトルは「ドルという不治の病」である。アメリカの深刻な病態（なぜ米国海軍は立ち直れないのか、なぜ経済格差と貿易赤字を縮小できないのか、なぜ学生たちをエンジニアリングと科学への道へと向かわせないのか・・・）に対して、トッドは、――無力さの原因としての「道徳ゼロ状態」を別にすれば、行動を阻害する純粋に経済的な「ロック装置」があるからだ。無から金銭的な富を引き出せるドルの能力こそが、アメリカを麻痺させている――と診断する。

第 10 章「ワシントンのギャングたち」は、アメリカの政治の暗部をギャングという言葉まで使って非難する。

第 11 章は、トッドの人類学的な見方から、「その他の世界がロシアを選んだ理由」を議論する。まだ進行中のロシア-ウクライナ戦争を概括して、世界の国々が「敗北する米国と西洋」ではなくロシア寄りの立場に立っている、と判定する。その理由としてトッドは、世界の国々を人類学的に分類して、その基底にロシアや中国などの強い父系制(兄弟間が平等でない直系家族制)の諸国と(兄弟間が対等な)「西洋」との対立を見る。(直系家族制だが女性も家を相続できる日本は西洋とも中国とも異なると見る)トッドは、日本がどうするのか問いかける。

終章「米国はウクライナの罠にいかに嵌(はま)ったか」については省略しよう。

それよりも今は、この書物の追記が重要である。そのタイトルは「米国のニヒリズム――ガザという証拠」である。タイトルは、ガザの悲劇は米国のニヒリズムが引き起こしているという見方を表現している。現在進行中のそのガザの悲劇に、自身も部分的にユダヤ人の血を引くトッドが心情を吐露する。「米国のニヒリズム」を見つめることは、トッドの言う西洋に属する日本に住む者にとって重要なことである。それをどのように克服するか考えなければならない。「ガザ」は、同時代に生きる人間に突きつけられた深刻で解決の困難な問題である。それでも、最低限よく注視して発言できるようにすることが必要なのだと思う。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

「日本語版のあとがき」は、われわれ日本人にとって重要である。最初に、アメリカが主導する「西洋」とロシアのあいだの戦争がもたらしている危機についてのトッドの総括は「西洋」の側でよく認識できていないことを指摘する。マスメディアの情報しか知らないわたしも、その指摘を十分に理解できない状態にある。しかし、現在の危機を知るためによく考えなければならない。トッドが日本人のためにしている忠告をよく聞く必要がある、と思う。世界中に炎が上がっている状況をもっと深く理解しなければいけない。

トッドは言う、――アメリカは 2008 年以降、世界を軍事的に支配することを諦めた。それ以降のアメリカにとって（限定的だが死活的な）目的は、第二次世界大戦後に構築された「帝国の維持」だと私は確信する。つまり西ヨーロッパ、日本、韓国、台湾に対する支配の継続である――と。そこに、アメリカの貿易収支の不均衡は、中国（2790 億ドル）よりも支配している「西洋集団（日本を含む）」（4050 億ドル）の方が大きいのだと指摘して、「属国の監視にこそアメリカの物質面での生存がかかっている」と書く。そう言われれば、トランプの言動が理解できる。歴史の展開を予言することはいつも困難だが、この状況分析には説得力がある。続くヨーロッパの情勢分析の適否は、日本のマスメディアの情報が少なすぎてわたしには判断がむずかしいが、客観的な統計データを用いて社会学的に物事を捉えようとするトッドの見解

に相当の信頼性があるだろう、と思う。

ヨーロッパ世界はフランス革命以来近代的な戦乱を経験してきたが、久しぶりの割合長く平穏だった状態がくずれようとしている。そのヨーロッパに住んでいるトッドは、現実的な危険を肌に感じているのだろう。日本人はその忠告に耳を傾けなければならない。東アジアも平穏だとは言い切れないのだから。

書籍『西洋の敗北』の内容を把握するためにノートに書きつけていたら、表題に掲げたテーマの考察にまでは至らなかった。やりたかったその考察は別の機会にしよう。

2025 年 3 月春分清書　　海蝶　谷川修